ロスプリベンションへの道4 協働防犯（23）

監査やセキュリティ担当者向け応援歌夫婦桜 窪監査室長事件簿 その一

NPO法人 全国万引犯罪防止機構

この物語は、ひそかに店舗の業務監査員たちに読み継がれている物語です。このところお会いする小売業の方々から社内不正の件についてご相談を受ける機会が多くなっています。

20年前に書いた内容ですので、現在のCSRの視点とは異なる箇所があるかと思われますが、少しでも不正対策のお役に立つことを願い、標題の連載の一部として発表いたします。

ある公認不正検査士／総合防犯設備士より……監査やセキュリティ担当者向け応援歌夫婦桜（めおとざくら）

―窪監査室長事件簿（くぼかんさしつちょうじけんぼ）―

第一章

一九九五年晩秋　時代は長い不況の荒波に向かっていた。

この時期の朝五時半は暗い。

窪泰雄は床の中で「仕事を辞めたい」とつぶやいた。

現場のあら捜しをしていることに耐え切れなくなった。以前いた人事部の仕事も重圧感でストレスが溜まったけれど、いまやっている監査の仕事に比べればまだましだった。

人事の仕事は知らなくてもいい情報を聞くことが務めだった。監査はさらに、その情報で人を裁かなければいけない。正確に言えば、裁きは監査報告書にもとづいて役員会が決定する。よほどのことがない限り報告書の提案通りの内容で決議される。窪が報告書を作成するため、監査室長の窪に判断が委ねられていた。

先週は電話で監査室にタレ込みがあったため臨時の監査をした。電話の内容通り店長が百三十万円の現金を着服していた。窪が新入社員のときに世話になった人だった。そのころ副店長だったその人は、手ごろな定食屋から風邪を引いたときの医者まで紹介してくれた。口だけでなくいっしょに来てくれたのだ。そのような恩人の不正を見つけなければならない仕事に窪は耐えられなくなっていた。

「そんなに嫌なら会社を辞めてもいいよ」といいながら妻の裕子が先に起きた。

二人の間には、三歳になる政尚がいる。小さな寝息が聞こえてくる。

先月、裕子は流産した。出血があり病院で検査をしたところ第二子の心音は消えていた。女の子だった。

「忘れないことが一番の供養になるから」

と二人は話し合って泣いた。その日、夫婦の絆が深まった。

妻の「辞めてもいいよ」に、窪は答えなかった。

しかし、すでに人材紹介の会社に名前を登録していた。窪はこのとき三十三歳だった。

月曜の幹部情報交換会議は午前八時から始まる。代表取締役社長・役員・本部長クラス・子会社の社長が集まる。佐伯幸三はこの衣料チェーンの創業社長だ。普通、創業者といえば泥臭いイメージが付きまとうが、佐伯は、行商から叩き上げた商人道一筋のわりには大学教授のようなスマートさをもっていた。読書家で何でもよく知っていた。

この会議は決まったテーマが無い。社長から順に発表していく。トピックスが無ければ「特にありません」と答える。この日は経営戦略本部長の森永が基幹システムM-400のサーバーが四階サーバールームに設置されたことを説明。次に営業本部長岡本が新店オープンの予算達成報告。そして商品本部長長谷部が遅れていた売れ筋のハーフコートの追加分が配送センターに到着したことを発表した。それ以外のメンバーは「特にありません」と答えた。人事部長の笠原の次が監査室の番だった。末席の窪は「特に…」と言いかけたとき、佐伯社長が口を開いた。

「五反田店でまた現金紛失があったという話だが、どうなんだ」

窪は急いで立ち上がり、苦しい説明をした。

「閉店時のレジ閉めのときには誤差が無かったのですが、翌日には十万円が不足していました。すぐにブロック長に調べていただきましたが、原因が特定できず、先日からは監査員が調査しています。昨年も同じ時期に五反田店ではレジの現金が十万円不足する件がありました。ですので、わたしもこの後、現地へ行きます」

社長は立ち上がり「二度あることは三度あるという言葉の意味するところは、仕組み作りの必要性を言っているのだ。仕組みが無いから同じミスを何度も起こす。とんでもない現金紛失が出るということは、当社（ウチ）がまだチェーンストア・システムを確立していない証拠だ。逆に言えば、それが改善できれば、まだまだ成長するということだ」と言いながら幹部一人一人の目を見た。さらに社長は続けた。

「原因を特定するまで帰ってくるなよ。窪」

窪は書類に目線を落とし、「はい」と答えた。

佐伯のこの冷たい気迫と逆転の発想が、三百店舗・年商二千億円のチェーンストアを前進させていく。

休憩室の自動販売機に100円玉を入れたとき、後ろから声を掛けられた。営業管理部次長の中田啓太郎だった。

「今回の監査（ケン）は大変そうだな。」

「社長からもはっぱを掛けられて大変ですよ」と窪はコーヒーを自販機から取り出した。

「解決できて当たり前、出来なければ降格だからな」と中田は胸ポケットからタバコを取り出し、喫煙コーナーへと歩きだした。

「その方がいいですよ。この仕事は荷が重いですから」窪は中田の横に座った。

中田は五歳先輩で、窪が店長をやっていたときの担当ブロック長だった。部下想いの優しい性格だった。小柄であばた顔なので愛嬌があった。独身なのは何年も寡い続ける女性がいたからだ。

「俺も気になって調べたんだ」と中田は営業管理台帳から調べたことを話してくれた。五反田店に関して、過去三年間で千円以上の誤差があったのは、昨年不明が発生した件と今回だけであり、それ以外の誤算はほとんど無かった。レジの取り消しや返品も件数も少なく、商品ロス率は年間で0・2%だった。全店平均よりも0・3%低い数字であること。つまり、問題のある店舗ではなかった」

「そうですか、前回と前々回の監査で高額品の数量棚卸を実施しましたが数量はピッタリ合っていました。商品を渡したのに現金を入金しないカラ打ち（オフブック・スキミング）もありませんでした。夜間の機械警備も調べましたが解除された記録は残っていませんでした。監査上は問題が無いのです。前回は昼間のPOSレジから現金が無くなり、今回の現金不足は夜間から早朝の間で起きたという違いだけです」と窪。

中田は「不足が確認された朝に五反田店から情報システム宛に電話があったそうだ。POSレジの開店操作についての簡単な質問だったらしい。その時は現金不足の話は無かったって。なあ、思わないか。監視カメラがあれば、もっと詳しい調査ができるのに…カメラが導入されているのは本店だけだからな」と休憩室の天井に付けられた監視カメラを見上げる中田だった。六百万円かけて導入した可動式ズームカメラは本店のレジ不正を二件見つけていた。売上金額の割に、本店レジの現金誤差の少ないのは、カメラの牽制効果があると見てよい。

窪は本店のレジからお金を抜き取る従業員の様子を録画映像で発見したとき、人は人に対して油断してはいけないと学んだ。

……

JEAS（工業会　日本万引防止システム協会）からの情報

※JEAS会報44号春号のデジタル版はこちらのリンクやQRから閲覧できます。JEASメンバーの活動を知っていただくと有難いです。

https://www.jeas.gr.jp/pdf/20260211.pdf

※JEASはセキュリティショー2026の会場ブースやセミナーで皆様のお越しを心よりお待ちしております。

全国万引犯罪防止機構（通称・マンボウ）

万引撲滅のための戦略を本気で提言・実践する小売業界を中心に組織化されたNPO法人

文・事務局（稲本義範）